大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

「男であること」と男女共同参画(2005年度男女共同参画政策推進のための研修事業)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 正博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004924

「男であること」と男女共同参画

森岡　正博

大学の授業で学生の話を聞いていると、「男らしさ」「女らしさ」を否定するのはよくない、という言葉が出てくることがあります。私のほうから話題を振ったのではないのに、彼らからそういう言葉が発せられることもあります。これが全般的な傾向なのかはどうかは即断できませんが、何かの風潮を反映しているかもしれません。たとえば、男子学生が、男はもっと男らしく責任をとれるような人間にならなければならないという趣旨の発表をしたことがありました。彼は、社会の中での男女同権はこの時代しかたがないが、家庭の中では、男はもっと堂々と振る舞うことが必要なのではないかと主張しました。聴いていた学生から反論が出るかと予想したのですが、そうはならず、逆に、賛同する声も上がりました。

若い男子学生たちからこのような意見を聴くたびに、私は、なんとも不思議な気分になってしまいます。いまの大学の男子学生は、ほんとうにおしゃれです。髪はきれいにカットして染めているし、チープなTシャツやジーンズをだらしなく着ているように見せかけて、実はかなり細かくおしゃれを計算しています。アクセサリーやピアスも普通になりましたし、みなそれぞれ自分のファッションで自己主張を自然にできているように見えるのです。私が彼らくらいの年齢だったころは、まったく事情が違いました。私の在籍していた旧帝大の環境もあったのでしょうが、アクセサリーなんかに気を使うのは、まったく「男らしくない」やつだ、という風潮が残存していた最後の時代だったと思います。当時、男もおしゃれしていいんだという風潮が商業主義とともに隆盛してきた時期でしたが、それでも、普通の男がピアスをする、ということは考えられませんでした。結婚指輪以外のファッションリングも、普通の男に対しては、ぎりぎり許容されてなかったと思います。実は私は、ピアスと指輪をしたかったのです。ですが、時代が私に押しつけてきた「男らしさ」に負けてしまって、それを身につけることができませんでした。

「男らしさ」の復権を説き、それに賛同するかのような男子学生たちの

親指にはめられたきれいな指輪、カラーリングした髪から覗くピアスを見るたびに、私は「うらやましい」と思ってしまいます。私がきみたちくらいのときには、それはできなかったんだよと言ってあげたい気分になります。「男らしさ」の復権にあまり付き合っていると、そのピアスも、カラーリングも、否定しないといけなくなるかもしれないよと、ささやいてあげたくなってしまいます。あなたたちは、男なのにそんなことが許されているというすばらしい時代を生きているのだよ、と私は彼らにはげましのメッセージを送ってあげたい。

男にとっての男女共同参画とは、きみたちのような、近代の「男らしさ」に我々よりはきつく縛られてない男性が、女性を心の底で蔑視することなく、かといって奇妙に崇拝することもなく、違いを持った人間同士として、慈しみ合える関係性を作り上げていくことが容易にできるような、そういう社会を男の側から作っていくことだと私は考えています。私の親の世代の多くは、性別役割分業の内部に堅く閉じこめられ、そこから外へと出てくることができませんでした。私の世代は、意識上では男女同権が当たり前になり、フェミニズムの主張も理解できるようになりましたが、実際の生活のうえでは、「男らしさ」の縛りや、「男であるという既得権」から自由になることはそれほどできなかったのではないかと思います。男女共同参画が、理念を超えて、実際の日常生活や社会生活で実を結ぶのは、いまの大学生、そして私たちの子ども世代がどうするのか、という点にかかっているように私には思えるのです。もちろんこれは私自身の責任を免責しているわけではありません。自分のいままでとこれからの人生において責任を果たしつつ、同時に、次の世代に向けても何かを受け渡していかないといけないように思っています。

平成17年12月27日に閣議決定された、新しい「男女共同参画基本計画」を読んでみました。これを読むと、男女共同参画社会にはまだまだ遠い道のりがあるということが分かります。また、それを達成していくためには、社会政策、経済政策、職場での雇用など、社会の基本システムの改革に、かなり意識的な努力を払わなければならないということをひしひしと感じます。こういうところが地道に改善されていってはじめて、差異のある男

女（個々人）が対等に関係をもって生きていける社会が到来するのだなと思います。と同時に、どういう社会が望ましいのか、あるいは男と女はどういうふうにあればいいのか、という意識の次元の問題も、けっこう大きいのだろうなということも感じました。というのも、新聞でも報道されましたが、今回の計画には、「ジェンダー」という箇所に異様に長い注釈が付けられています。それは、第2部第2節の「男女共同参画の視点に立った社会制度・慣行の見直し、意識の改革」という箇所です。そこでは、「社会的性別」（ジェンダー）という概念の意義が述べられると同時に、「性差を否定する」ような「ジェンダー・フリー」の考え方は男女共同参画とは相容れないということが述べられています。この箇所の記述についてはすでに他の場所で専門家による適切なコメントも出されているので、いまは踏み込みません。ただひとつ確認しておきたいのは、男女共同参画基本計画というお役所の文書の中で、この部分にのみこのような突出した注釈が加えられねばならなくなっている、ということの意味を我々は冷静に考えた方がいいのではないかということです。ジェンダー・フリー・バッシングに押し切られた、ということだけではなくて、なぜ「この地点」において押し切られた（押し切られようとした）のか、ということを冷静に分析しておくことは、けっこう重要なのではと思うからです。いまの私はまだ勉強不足で、この点をまだきちんと捉えきることができていませんが、しかしそれを念頭に置きながら、話を進めていきたいと思います。

基本計画の先の箇所には、「男らしさ、女らしさや男女の区別をなくして人間の中性化を目指すこと」は、男女共同参画社会とは異なる、と書かれています。話はそれますが、これを読んだときに、私は昔見た羽田澄子監督の『痴呆性老人の世界』というドキュメンタリー映画を思い出しました。そこには高齢者施設での高齢者の様子がリアルに描かれているのですが、印象的だったことのひとつは、高齢になればなるほど、男性と女性の見かけの区別が付きにくくなるということでした。風貌を見ただけでは、おじいちゃんなのか、おばあちゃんなのか、容易には分からないのです。そしてさらに歳をとるにつれて、高齢者の方々の「中性化」はますます進んでいるように見えたのでした。日本はこれから超高齢社会を迎えます。

70歳を超えて、まだ20年近くも社会や家庭の中で暮らしていく人々が激増することでしょう。日本人口に占める彼らの総数が増えるにつれて、日本人の見かけの平均値が必然的に「中性化」していくのは、もう避けられない現実なのです。（もちろん高齢者の「内面」はさほど中性化しないのでしょうけれど）。高齢社会において、人間が「中性的」でない姿を誇ることのできる期間は、さほど長くないのです。いくらホルモン充当治療をしようが、焼け石に水でしょう。超高齢社会における「ジェンダー」という視点から、もう一度、いろんな問題を見直していくと面白いかと思います。

話がそれたので元に戻しましょう。基本計画の注釈の部分は、男女の「中性化」を極度に畏れているわけですが、若者の現実はもうそんなところを超えてしまっているようにも思います。冒頭にも言いましたが、男の子はピアスに指輪だけではなく、化粧もしはじめています。「ゴスロリ」というジャンルの雑誌では、美形の男の子が、女の子向けの洋服（ワンピースやスカート）を着てモデルになって自然に溶け込んでいます。それに加えて、「ユニセックス」などのまさに中性化を目指すファッションがあると同時に、「マッチョ系」「セクシー系」などの、高度にセックスを強調したファッションもまた同様に受け容れられています。要するに、自分の姿をどう見せるのか、自分に何を着せるのか、という面においては、もう事実上なんでもありの状態になっており、またそれを声高にとがめる価値意識も以前よりは極度に減退してきていると思われるのです。基本計画では「中性化」は男女共同参画社会ではないなどと寝ぼけたことを言っていますが、こと日常のファッションにかんして言えば、もう事態はそんなところは完全に通り越してしまっていると言ってよいでしょう。つまり、「中性化」あり、「男のマッチョ化」あり、「男の女性化」あり、の何でもあり状態なのです。そしておそらく、今後の若者の男性たちは、この自己表現の自由と快楽とを手放すことはないでしょうし、手放さないことを私は心から祈りたいと思います。（もちろん彼らですら意識的・無意識的に避けているコードは存在します。たとえば一般生活でのスカートはいまだ受け容れられていません）。

そのうえで私が思うのは、そのようなほとんど何でもありのジェンダー

意識のもとで育ったおしゃれな男の子たちのなかに、なぜ「男らしさ」の大切さを語る者がいるのか、なぜ彼らの多くはそれを聴いても反発したりしないのか、ということです。ここにはおそらく彼らの「アイデンティティ」の問題が絡んでいるのではないか、と私は推測しています。つまり、男を装おうが、女のアイテムを利用しようが、中性化しようが、ほとんどすべて許されるようになった社会の中で、彼らのアイデンティティが逆に揺らぎはじめているのではないかということです。この社会は、制度的、規範的、文化的にはいまだきつく「ジェンダー化」されています。社会生活において常に男であるか女であるかを自覚させられる儀式が蔓延していますし、学校社会においても男は男同士、女は女同士でつながりあい、そのグループの中で生活慣習や価値意識を共有しながら成長していきます。すなわち、一方においては、ファッションや自己表現は何でもありだよということになっており、教育においても男女同権が当然のこととして説かれているわけですが、他方においては、男女別のグルーピングが社会の中で幅をきかせ、「隠されたカリキュラム」としての「男らしさ」「女らしさ」学習が事実上強制されているという現実があります。

この双方のあいだに立たされて、「ジェンダー・アイデンティティ」の混乱状況にいつでも陥りかねないような状況が、とくに若い男性のあいだで、いま作られているのではないでしょうか。女性はもちろんこれとは多少重なりつつもまた別種のジェンダー・アイデンティティの混乱状況に陥って（陥らされて）きたわけですが、男性もまた似たような状況になってきたのかもしれないと私は思うのです。（もちろん性的マイノリティの方は、さらに深刻な混乱を強制されることになりがちです）。ジェンダー・アイデンティティの混乱とは、ジェンダーの面において、自分自身が何者なのか分からなくなるということです。アイデンティティが混乱してしまうと、その人間は、なんとも言えない不安に陥ることがあります。そしてその不安を解消するためには、みずからが納得するような新たなアイデンティティを構築しなければならない、と感じる人は多いでしょう。アイデンティティの再構築は、その人間とその人間が属する集団とのあいだ、あるいはその社会で機能する価値規範とのあいだにおける、アイデンティテ

ィ・ポリティクスを伴います。そしてそのポリティクスは、身の回りの「小さな政治」から、天下国家の「大きな政治」にまで及ぶことでしょう。それらのポリティクスへの主体的参与を経由することによって、あるいはその主体的参与のただ中において、混乱したアイデンティティの取り戻しが達成される可能性が出てくるのです。そして自分のアイデンティティの混乱を解消しようとするときに、もっとも手に取りやすい素材こそが、「男らしさ」の復権なのではないでしょうか。女性的なアイテムを身につけた、おしゃれな男の子が、「男らしさ」を口にするときに、彼の心理を駆動している機制は、実はこのような種類のものではないのでしょうか。すなわち、彼が目指しているのは、本気で「男がまだ男であった時代」を取り戻そうとしているのではなく、男らしさの復権というポリティクスに参与することによって、みずからのジェンダー・アイデンティティの混乱からくる不安を解消し、男として生まれてきた自分を自己肯定しようとしているのではないかと私は思うのです。ジェンダーの多様性と自由を失うことなく、そのうえで「男として」みずからを肯定したい、ということではないでしょうか。私はそういうふうに直観するのですが、ここには私の希望的観測が入っています。なぜなら彼らの中にも、本気でマッチョになりたいと思い、男はすべからくそうあるべきだと思っている人もいるかもしれませんし、実はそれが彼らの心理レベルでのマジョリティかもしれないからです。

この点に関して、海妻径子の論文「対抗文化としての〈反「フェミナチ」〉」（木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル』白澤社　2005年）が参考になります。海妻は、インターネットの匿名掲示板などでひときわ目立つ「フェミナチ」糾弾現象に着目します。これは、フェミニズムの主張はナチズムと同じ全体主義の押しつけだとして、それへの抵抗を呼びかける言説です。もちろんこれは昨今のバックラッシュの動きと呼応しているわけですが、しかしながら、「フェミナチ」発言をしたり、それに同調する匿名の人々が、すべてバックラッシュ運動家というわけではおそらくありません。むしろ彼らは、バックラッシュ運動とは無関係に、ある漠然とした反感をフェミニズムに抱いていると見た方がよいのではないかと私は思っ

ています。海妻は、これらの「フェミナチ」発言をする主体はおそらく若年男性たちであろうと推測したうえで、「そこには、もはやフェミニズムこそが支配権力の一部であり、自分たちはそこへのレジスタンスを試みなければならない〈支配されている被害者〉なのだ、というニュアンスが、明らかに含まれている」と指摘します（37～38頁）。なぜ彼ら若年男性たちがフェミニズムに対してそのような被害者意識をもってしまったのかというと、格差社会の到来によって、男性が中心と周縁の二極に分化して再編されてしまったからだと海妻は言います。しかしながらフェミニズムの声は、いまだに「男性が女性を構造的に抑圧しているところに問題がある」というふうに聞こえてきます。それを聞いた周縁男性たちは、なぜ自分たちが「抑圧側」だと言われなければならないのかといらだってしまうのです。「なぜならばその時フェミニズムは周縁化された男性にとって、周縁化は虚偽であり存在しないのだと自分に思い込ませようとする、支配権力から自分たちへの洗脳である」ように見えるからなのです（38頁）。「フェミニズムは男性による権力の独占を否定し、もはや権力からほど遠いところにいる男性を生み出しておきながら、彼らにさらに攻撃を加えている」というふうに映るのです（46頁）。海妻のこのような分析は、とても重要だと思います。

これを聞いたフェミニストの方々は、抑圧されているのは女性なのに、どうしてそれと戦おうとしている我々が「抑圧者」だと言われなければならないのかという怒りを感じるかもしれません。しかしここはいったん冷静になって、どうしてこのような被害者意識が男性の一部に芽生えはじめているのかについて、さらに検討を加えておくことが必要です。まず意識的な政治活動をしているバックラッシュグループと、彼らに賛意を示すだけの匿名のギャラリーをとりあえず区別しておきましょう。そしていまインターネットなどで「フェミナチ」言説を書いたり、それに同調している人々の多くは、後者であるという推測が成り立ちます。彼らは、おそらく若年男性たちであり、学校では男女同権を教えられ、女性にいわれなき差別をすることは悪であると教え込まれた世代であるはずです。海妻は、彼らが社会格差の犠牲になって「負け組」となり、周縁化されてしまったと

きに、フェミニズムの言説が彼らの耳にどのように聞こえるのか、という問いかけをしています。その答えは、「男はすべて抑圧者である」というかけ声のもとに、自分たち被抑圧者の男たちの存在を認めない「権力者の声」として、フェミニズムの言説は聞こえるということになります。もし事実として、そのような被害者意識を心の底にもっている若年男性たちが、層を成して存在しているのだとしたら、それは男女共同参画の推進にとって、大きな障害になるはずです。彼らに向かって、「あなたの感じ方は間違っている」と言うのは逆効果でしょう。彼らにとっては、フェミニズムの声は、すべて権力者による「高みからの声」に聞こえるに違いありません。だから「ナチ」というふうに表現するのだと私は思います。

振り返ってみれば、フェミニズムはこれまで、「高み」に安住している「権力＝男性」に対抗して、彼らに何としてでも自分たちの「声を聞かせる」という戦略を取ってきたのではないかと思います。そしてそれはある程度成功しました。しかしながら、フェミニズムは、自分たちが「高みに立っている」として糾弾される立場に立つことになろうとは、ほとんど予測してなかったのではないでしょうか。しかしそれがいま現実に起き始めていることなのです。フェミニズムは、「高み」に安住している「権力＝男性」に対して、「あなた方は間違っている」「あなた方の作り出してきた社会は間違っている」と糾弾してきました。それはたしかに正しい指摘であったと私は考えています。しかしながら、フェミニズムを「高みに立って抑圧する者」としてとらえて被害者意識をつのらせている男性たちに対しては、フェミニズムは何を言えばいいのでしょうか。「あなた方は間違った考え方をしている」と言うのでは、「ほら、やっぱり僕たちの間違いを高みから矯正しようとしてくる」という被害者感が増すばかりでしょう。かと言って、「あなた方は男性だから、やはりこの社会では女性より上位に立っている」という言葉にはもはや説得力はないでしょう、とくにそれらの言葉が、有職者である大学教員、団体職員、文化人などから発せられるのであれば。「あなたたちは甘えているのだ」というのでは、単に「上から」叱られているだけということになってしまいます。今のフェミニズムは、彼らのような男性のこころに届くような言葉をほとんどもっていな

いのではないかと、私は思わざるを得ないのです。

ここからは私の意見なのですが、「フェミニズムは言説の面ではすでに支配権力として機能する」という事実を、フェミニストはしっかり自覚しておくべきではないかと思います。なぜなら男女同権の主張それ自体は「正しい」ことだと、多くの人々に理解されてきたわけですが、「正しいとみなされる主張」は、それを「正しい」と認知する男たちの中に抑圧感を生み出します。たとえば禁煙・分煙の主張内容それ自体は、今日では「正しい主張」とみなされています。であるがゆえに、それでもタバコをやめられない人々のあいだに著しい抑圧感を生み出しています。反タバコ論の暴発を見るにつけ、その抑圧がいかに深いかを実感することができます。話をフェミニズムに戻すと、「フェミナチ」発言をしている人々も同じなのであって、彼らのほとんどは、実は、フェミニズムの主張が大筋で正しいということを「知って」いるのだと私は思います。それを知っているからこそ、その「正しい」ことを大上段に振りかざしてくるフェミニズムというものに、どうしようもない反発を感じてしまうのではないかと思うのです。

では、フェミニズムの主張が大筋で正しいということを「知って」いるのならば、粛々とフェミニズムに従えばいいのに、どうしてそんなに反発するのかということになります。その理由のひとつは、フェミニズムの主張がもし「正しい」のだとしたら、男である自分は、男としての自分自身の存在を「自己肯定」できなくなってしまう、というひりひりとした危機感が彼らの意識下にあるからではないのか、というのが私の仮説なのです。(他の理由としては、「男の沽券・メンツが許さない」こと、「男の既得権を失いたくない」ことがあげられるでしょう。実際問題としてはこちらの理由のほうが、社会に広く分布していると思われますが、これについてはすでにみなさん十分ご承知だと思いますし、研究も出ていると思われますので、今日は触れないことにしたいです。)

この危機感というのは、実はこの私もまた自分自身のこととしてよく分かる感情なのです。なので、ここからは私自身の感じ方も交えながら考えていきたいと思います。今日、フェミニズムは多様化しています。フェミ

ニズムの世界の中では一様なフェミニズムの姿は消え失せたと言ってよいかもしれません。しかしながら、フェミニストが男に向かって言論や教育を行なうときのフェミニズムの内容は、それにくらべると多様化してはいません。そこにある基本的な前提は、「男が作りだしてきた仕組みが女を抑圧して、生きにくくしてきた」「だからその仕組みを変えていかねばならない」というものです。一般の男が耳にするフェミニズムが、この基調低音をはずすことは、ほとんどないと言ってよいでしょう。この基調低音が繰り返されるときに、男がそこから有無を言わせず聞き取ってしまうメタメッセージがあります。それは「男が悪い」「男のせいで女は生きにくくなった」というメタメッセージです。男女共同参画の集まりに男性があまり来ない理由のひとつは、その場が「男は悪い」というメタメッセージで埋め尽くされることに対する、どうしようもない居心地の悪さを男たちが感じるからでしょう。

このようなメタメッセージを浴びせられたときに、それを「うるさいなあ」と一蹴できる男もいます。そういう男たちは二度とフェミニズムの話を聞きに来たりはしません。しかし逆に、メタメッセージを浴びせられながらも、そのメッセージの具体的な内容を「正しいなあ」と理解してしまうタイプの男性もいるわけです。たとえば社会制度の歴史をジェンダーの側面から解説されれば、たしかに歴史の中で男性が女性を束縛してきたのは間違いないと分かるからです。それを理解してしまうタイプの男性は、どうなるかというと、「男が女を束縛して生きにくくしてきたことはたしかに正しい」ということを認めざるを得なくなります。それをいったん認めてしまうと、フェミニズムの言葉から発せられる「男は悪い」「すべては男のせいだ」というメタメッセージが、さらにぐさぐさと心に突き刺さるようになります。そしてその結果、「男であるということは、悪いことなのだ」と糾弾されているような気分になるのです。

つまり、フェミニズムの主張を理解してしまうタイプの男性は、知らず知らずのうちに、「男であるということは、悪いことなのだ」というところにまで追い込まれてしまう危険性があるのです。「男であるということは、悪いことだ」と言われても、自分は男として生まれて、男として育っ

てきたのだから、そこを否定されるということは、いまの自分の存在の根本を否定されることでもあります。「そんなのは嘘っぱちだ」と言おうとしても、それが嘘だと言い切れる自信は出てきません。いったんフェミニズムの主張を認めてしまえば、自分が男であるということを自己肯定できなくなるところまで追い込まれてしまうかもしれません。フェミニズムからの声は「男は悪い」「男は悪い」という響きをもって聞こえてくるわけです。それはあるときは糾弾調であり、あるときは教育調であります。ともに「上から」正論として言われてきます。それが「正しい」ということを知った身としては、理屈では言い返せません。でも、言い返さないと、自分が男であるという根本のところが崩されてしまうような気がします。この、上から正論で押さえ込まれているというすごい抑圧感、もうそれ以上言わないでくれと言いたくなるような強い調子。この抑圧をなんとかしてはねのけないと、自分が男として生まれ、いま男として生きていることに対して、「これでよし」と言えなくなる。でも理屈でははねのけられない。そうしたときに、男がとるのは、理屈ではなく、感情でそれをはねのけようとする行為でしょう。それは、「上から俺を押しつぶそうとしてくるのをやめてくれ！」という叫びとなることでしょう。それはフェミニズムが憎いからしているのではなくて、いまここで男として生きている自分自身の「ジェンダー・アイデンティティ」を死守したいから、その声をはねのけようとするのです。彼らのフェミナチ批判の内容が、幼稚なものに見えるのは当たり前のことです。彼らを突き動かしているのは、論理でフェミニズムをうち負かすことではないのです。彼らを突き動かしているのは、この「上から」自分を押しつぶそうとしてくる力を、どういう仕方でもいいからはねのけて、自分自身のアイデンティティを守りたいということだからです。

もちろんいま述べたことは一つの仮説にすぎません。ただし、これは単なる論理ゲームではありません。ほかならぬ私自身の心の中に、これと同じ心理機制が存在しているのです。私は、学生時代に80年代フェミニズムによって、ジェンダー問題に目を見開かされました。フェミニズムは私の先生です。私はフェミニズムの主張を正しいと思い、いつしかプロフェミ

ニスト・マンというスタンスに立つようになりました。私自身はフェミニストではない（にはなり得ない）が、フェミニズムを側面支援する男でありたい、という意味です。みなさんに注意していただきたいのは、プロフェミニスト・マンを自認する私のような男の内部にすら、いま述べたような気持ちが存在しているということです。私自身この問題にまだ決着を付けることができていません。私の心の根本のところには、「男に生まれるというのは、悪なのではないか」という自意識があります。これはフェミニズムによって植え付けられたわけではありませんが、しかし学生時代に学んだフェミニズムがこの自意識をはげしく強化したことだけは確かです。私は、「男は悪い」というフェミニズムのメタメッセージにきわめて過敏に反応してしまったのです。

「フェミナチ」批判をする若年男性が、いま述べたような気持ちを抱いているのかどうかは分かりません。それは心理の深層部分を含むでしょうから、表面的な社会調査を行なっても解明できるものかどうか疑問があります。なので、以上に述べたことはまだ単なる仮説の域を出ません。しかし、私以外の男たちの意見も聞いていけば、これをも含めたもっといろいろな感情があることがわかって有益ではないかと思います。

私の以上の推論から導かれることの一つは、「フェミナチ」批判をする男たち、あるいは「男らしさ」の復権を主張する一部の男たちは、フェミニズムを理解していないあるいは誤解しているからそういう主張をしている、のではないかもしれないということです。彼らはある意味でフェミニズムの主張の核心部分を的確に把握しているがゆえに、その結果として訪れるであろうみずからのジェンダー・アイデンティティの危機を察知し、それを守るために反フェミの言説を吐いているかもしれないのです。そのような彼らの目には、フェミニズムとは、「男として生まれたことの自己肯定の作業を抑圧し、暴力的に妨害してくる」勢力として映ることでしょう。そしてひょっとしたら、このような心理機制は、実は政治的バックラッシュ運動をしている一群の男たちにも、若干は当てはまる部分があるのかもしれません。

海妻は、ネオリベラルの資本主義によって周縁化された一部若年男性た

ちが、その事態を理解せずに自分たちを抑圧的に敵視してくるフェミニズムに対して、「ネオナチ」バッシングをしているのではないかと分析しました。私は海妻のこの見解を補強するために、以上に述べたような男性のアイデンティティの問題を付け加えてみたいのです。海妻は、ネットの匿名の若者たちは「ネタ」になるものなら右でも左でもどっちでもとびつくのだという見解に言及して、「よしんば担い手の主観的には〈「ネタになる／萌える」ことができれば、「右」にも「左」にも転ぶ〉ものであるにせよ、結果としては明らかに若者ネット文化は「右」に転びやすい（言うなれば、〈「左」に対してよりも「右」に対する方が「萌え」やすい〉）ものなのであり、そこにはやはり「左」への嫌悪を選好させる力学が存在している、と考えざるを得ないのである」と述べています（49頁）。なぜ、「右」のほうに萌えやすいのかという理由のひとつは、彼らがこだわっているものがみずからの「アイデンティティ」だという点に注目すれば、明らかになるように思われます。すなわち、アイデンティティのゆらぎを抱える者の不安を鎮めるための装置＝文化資産を、「右」＝「保守」の陣営のほうがより豊かに所有しているからです。エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』における分析を待つまでもなく、より大きなものや伝統との一体感によるアイデンティティの補強・再構築こそが、心の中心部分がゆらいだ個人に対するもっとも即効性のある処方箋だからです。

男のアイデンティティの部分におけるねじれは、男女共同参画の推進にとっても、無視できない要素ではないかと私は思っています。男女共同参画は、女性と男性の双方の協力がなくては進まないものであることは明らかです。このようなねじれが、ある種の男性たちの心理部分に存在するのならば、それをどのようにして解消できるのかを、考えていくことはかなり重要なことだと思います。フェミニストからは、「そのような男としての自己肯定などは、女に被害を与えないような形で、勝手にやってくれればいい」とか、「〈男〉としての自己肯定、というところにこだわる自分自身をまず解体してみたらどうか」などの、突き放した意見も出てくることでしょう。たしかにそれはそうかもしれません。ですが、ここは少し立ち止まって考えてみましょう。ジェンダー問題を早くから意識させられてき

た女性たちにとってすら、「女としての自己肯定」というのは、巨大な難問として依然立ちはだかっています。ましてや、ジェンダー問題にあとから気がつきはじめた男性たちが、自己肯定の問題を自分たちだけでそんなに素早く解決できるはずはないのです。

また、あなたの言うフェミニズムとは、いったいどのような「フェミニズム」なのか、という疑問の声も当然出てくることでしょう。あなたの言うような、一枚岩の古色蒼然たる「フェミニズム」はもはやどこにも存在していないのである、と言われるかもしれません。ですが、ここもまた冷静になって考えてみてください。女性学の世界の中ではたしかにそうかもしれません。しかしながら、社会の中で男たちが耳にするときのフェミニズムははたしてそうでしょうか？ フェミニストたちのほとんどは、女性学の世界での言説のトーンと、社会の中で男たちにしゃべるときの言説のトーンを、意識的に変えてはいないでしょうか。社会の中で男たちが耳にするフェミニズムは、やはり依然としてきわめて教育的、糾弾的なフェミニズムです。たとえば、男女共同参画がいかに進んでいないか、職場での女性差別がいかに女性の社会進出を阻害するか、セクハラはなぜ悪いのか、ＤＶがどうして起きるのか、ポルノはなぜ女性を傷つけるのか、これらの話をとおして男たちはフェミニズムの考え方に触れます。それらの言説には、「フェミニズムといっても、いろいろある」とか、「性関係をコードする形而上学的原理が問題なのである」などという話は出てきません。それらの話の中に満ちているのは、やはり、男が女を構造的に抑圧する社会の中で、いかに女が生きにくいのか、その原因はどこにあるのか、そしてそれを変えていくためにわれわれは何をすればいいのか、という主題なのです。そしてそれらの話を男が繰り返し聞かされたときに、彼らが聞いてしまうメタ・メッセージとは、やはり「男は悪い」「男は悪い」というものとなってしまうことが多いのではないでしょうか。

もちろんフェミニストの側から言えば、私たちはそんなことは言っていない、ということになるでしょう。「私たちが言ってきたのは、男に生まれたことが悪いということではない。男が女に対して抑圧的にふるまってきたこと、そういう構造を作り上げてきたことが悪いと言っているのだ」

ということになるでしょう。それはたしかに、そのとおりなのです。問題は、ある種の男たちの耳には、「そのようには聞こえない」という点なのです。そして「そのようには聞こえない」という点が、今日、大問題として浮上してきているのではないか、というわけなのです。このような場合、「聞こえないほうが悪い」のでしょうか。

きっとそうではないでしょう。男女共同参画を進めていくうえで大事なことのひとつは、「男であるということは悪くない」ということ、しかし「男がいままで作り上げてきた構造は悪い」ということの両方を、はっきりとすべての男たちに伝わるように言っていくことだと私は思います。様々な政治やジェンダーバイアスが複雑に交錯する状況下で、この二つのことをきちんと表現して伝えていくこと自体、かなりたいへんな難問であることは承知していますが、それでもなおこのことをすべての男たちに伝えなければ、これ以上前にはなかなか進めないのではないでしょうか。もちろんそれは、フェミニストや女性運動だけに課せられた課題ではありません。男性の側から、同じことを、別の言い方で男たちに言っていくことが必要です。男性から男性への強い働きかけがないかぎり、男女共同参画の目標を達成することはできないからです。

この「男であるということは悪くない」というテーマは、たいへんな大問題をたくさん含んでいるということを、私は認識しています。たとえば、どうしようもないＤＶ男が、この話を聞いて「男であるということは悪くない」のだと自己肯定してしまったらどうなるでしょうか。彼の暴力はますますはげしくエスカレートしていくことでしょう。では、彼を拘束して、「男であるということが悪なのだ」と徹底的に自覚させるとどうでしょうか。彼は自分が存在していることの意味を見失い、生きる力を喪失してしまうかもしれません。被害者の視点から見た場合、彼がそのくらい痛めつけられたほうが爽快で、気が晴れるという意見はたしかに理解できる部分はあります。しかしそれはけっして望ましい解決法ではないでしょう。望ましい解決法は、やはり、「男であることは悪くないが、ＤＶ男であることは悪い」ということを徹底的に自覚させ、その自覚にそって生き方を改めさせることのはずです。ただし、それが実際いかに難しいことかは、多

くの専門家が指摘するとおりです。私の研究仲間である沼崎一郎は、ＤＶ男性の自己正当化の心理がいかに強力であるのかを強調しています。彼らは自分が暴力をふるうことを徹底して隠し、もし明るみに出たとしてもどうして暴力が不可避であったかということを能弁に説明して、自己正当化をはかろうとします。沼崎の指摘を重く見れば、今日の私の話をそのままこれらの男たちに当てはめるのは、いささか無理があるように思います。とくにＤＶ男性に対しては、異なったアプローチが必要なのです。

また、当然のことですが、男たちのなかには、「男として生まれてきてよかった、女に生まれなくてよかった」と最初から自己肯定している者だけではなく、「男として生まれたことに大きな違和感をもっている」性同一性障害の方もおられます。この場合もまた、彼らに対して、「男であることは悪くない」とナイーブに発言することは、かえって事態を悪化させ、複雑にしてしまう危険性があります。「男」も一枚岩ではないのですから、繊細な注意が必要です。「男でもなく、女でもなく」というスタンスの取り方も当然あるわけです。今日の私の話は、この意味で、かなり限定つきのものだと考えてくださったほうがよいかと思います。

それらのことを十分理解したうえで、やはり「男として生まれてきてよかった」とは、そもそもどういうことを意味するのか、その場合の「男」とはいったい何なのか、について考えを深めていく作業も必要だと私はいま思っています。この場合の「男」とは、単に生物学的な「男」のことではありません。「ジェンダー」「セクシュアリティ」が絡み合った、実存者としての「男」です。「男である」というのは、それをすべて含み込んでいるわけであり、かつその内容自体が変更可能でもあるという不可解な存在形式です。これについて考えることは、ジェンダー／セックスについて、再度はじめから考え直すことになるでしょう。これは学者としての作業ということになるかと思いますが、このような点を掘り下げて考えることもまた、ひいては男女共同参画を進めるうえでの、力になっていけるのではないかと考えています。

最後に、ふたたび繰り返しておきたいのですが、私が本日言いたかったことというのは、フェミニズムへのバックラッシュが起きる心理のひとつ

として、「男として生まれたことは悪である」というメタメッセージを、フェミニズムが高みから浴びせてくるかのように一部の男たちには「聞こえて」しまうということ。したがって彼らは、男として生まれたみずからのアイデンティティを守るために、その声に対して感情的に反発せざるを得なくなるということ。であるがゆえに、男女共同参画社会をめざすためには、「男であるということは悪くない」ということ、しかし「男がいままで作り上げてきた構造は悪い」ということの両方を、はっきりとすべての男たちに「伝わる」ように言っていく必要があるということ。そしてそのためには、女たちからの働きかけと、男たちからの働きかけの両方が不可欠であるということ。こういうことを言いたかったのでした。

こうやって言葉にしてみれば、これは何も新しいことを言っているわけではありません。問題は、こんなに当たり前であることが、どういうわけか、ジェンダーの壁を超えて伝わっていきにくい、というあたりにあるのだと思います。また、今日の私の話を聞いていると、男の被害者意識ばかりが強調されているようで、男が抑圧者だといういちばん肝心のところがぼかされていると感じる方もおられたかもしれません。いままで男が女を抑圧してきたのに、その歴史を忘れて、突然「女が男を悪者扱いしている」と言って被害者ぶるのは、非常に腹立たしいという感情を持つ方もおられることでしょう。この点については、私のしゃべり方に至らないところがあったのだと反省したいと思います。ジェンダー問題についての、男性と女性の対話ははじまったばかりです。あせらず、前向きに対話を続けていければと考えているところです。